2017 vol.40　秋号　源流からのたより

ぽたり

源流のひとしずく

CONTENTS

・事務局長コラム
・「源流学」⑭
・源流の主役たち
・居伝城はどこ？
・吉野川紀の川しらべ隊
・源流学の森づくり

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
ＴＥＬ　0746・52・0888
ＦＡＸ　0746・52・0388
ＵＲＬ　http://www.genryuu.or.jp
E-mail　morimizu@genryuu.or.jp

『可能性を拓く。』

～中間報告～

公益財団法人　吉野川紀の川源流物語　事務局長　尾上　忠大

私たちの職場では毎年度スローガンを掲げて、スタッフが日々の業務においてひとつの視点として常に意識し、具現化と行動化そして達成がすることを目指しています。本年度のスローガンは『可能性を拓く。』です。「使いきれてますか？これまで、これから。」という自らへの問いを添えています。

具体的に目標においたことは、森と水の源流館と本財団の15周年にあたる今春に向けて、昨年度後半に改修工事が行われた源流の森シアターのことです。おかげざまで同シアターのジオラマ演出や映像プログラムは、これまでも観ていただいた方々からは高い評価をいただいていました。子どもたちの学校遠足でもいつも印象に残ってくれているようです。しかし森と水の源流館のメイン空間でありながら、活用する時間帯は通常1時間に2回だけということが気になっていました。まさにこの空間の可能性をもっと引き出したいと、2年ほど前から考え始めて、いろいろな実験を繰り返しました。照明機材や音響機器を持ち込み、コンサートや人形劇、環境省が取組む「森里川海」の全国的なミーティングイベントを開催したこともありました。どれも水源地の森に居るような雰囲気で、森と水の源流館ならではの催しとなっていました。「これはいける！」と手ごたえをもって、改修計画に取組みました。決して華やかな改修でなく、講演会やコンサート、会議やワークショップなどができるよう照明の明るさを調整できるようにしただけのことですが、それによって活用の幅が広がると感じていました。またこの改修と同時に平成26年度に行われた全国豊かな海づくり大会の様子を交えた、約5分間の映像プログラムを導入しました。これまでのジオラマ演出だけでは伝えられなかった、水源地の村づくりのメッセージが伝えられるようになっています。

開館 15 周年記念イベント

では本年度に入り、この空間の可能性をどれくらい拓けたか？

4月29日には開館15周年のイベントを行いました。詳しくは前号をご覧ください。また5月は恒例の「おはなしカーニバル in よしの」でのピアノコンサートや楽器のワークショップなどを楽しく行っていただきました。さらに企業の新人職員研修会や中学校の交流事業などでも、これまで映像を見るだけであった空間が、セレモニーやレクチャー、意見交換などに使われました。川上村源流の日（11月16日）にもコンサートを開催しました。このように同シアターについては、おおいに可能性を拓いてきています。

企業研修での開会式の様子

しかし、「可能性を拓く」のはシアターのことだけではありません。スタッフ一人一人「これがないからできない、やらない」という理屈を考える前に、やりたいこと、できることにどんどん挑戦していく、限られた人材が最大限にいかされるということが目標です。

筆者については・・今年もここまでいろいろな可能性に挑戦しています。また機会があればこのページで書かせていただきたいと思います（笑）

川上村源流の日 記念コンサート

達ちゃんが語る 子どもたちに伝えたい「源流学」 ⑬自然のなかで生きる術を学ぶ

最近の子どもらは、ほんま、忙しいなぁ。学校終わってからでも、塾や習い事に行ったりして、大人より忙しかったりする。勉強も大事やと思うけど、それが人生のすべてではないと思うんや。子どもの時分に、もっとゆとりのある、遊びのある時間を持たないとあかんと思う。

学校あがって就職したら、なんかしようと思っても、なかなか時間をとることなんてできへん。遊ぶことは悪いことではない。遊びは学びの宝庫や。楽しく遊ぶなかで、いろんなことに挑戦してみたり、失敗したりしながら、自分でいろいろと考えてやってみることが大事なんや。大人になったとき、それが非常に重要になってくると、わしは思う。

わしの子ども時分は、遊ぶといえば、たいがい川やった。夏も冬も魚とりばっかりしとったなぁ。夏場はそのまま川に入って潜ったりするけど、冬場は寒うて川に入られへんから、自分で作った「箱メガネ」で川の中をのぞいて、魚をとったりしてんや。箱メガネはな、板を組み合わせたあと、底にガラスをはめ込んで完成するんやけど、水が入らんように板と板の間にロウソクのロウをたらしたりして工夫したな。

その箱メガネを持って、川岸につながれてる筏の上から川の中をのぞいて、魚を見つけてヤス（ヤリのこと）で魚をとっていた。こういう技術や知恵は、待ってても誰かが教えてくれるもんでもない。だいたいガキ大将らがすることをじっと見て、見よう見まねで自分のもんにしていった。じっと見てな、なんでああするのか、ああしたらどうなるんやろうか、と、考えもって覚えたんや。それに加えて、こうやったら、さらにうまくいくやろなと、自分なりにいろいろ考えてみたもんや。

いまの時代やったら、誰かに教えてもらえるまで待っているわなぁ。自分で考えたり、尋ねてきたりする子は少ないと思う。でもな、実はそういう体験や経験の積み重ねこそが、いろんなところで、「智恵」となって、生かされていくんや。自分で考える癖をつけることで、どんな場面に遭遇してもな、対応できるようになっとる。せやから、子どもの時分にどれだけ遊んどるかで、重要になってくるんや。

たわしの子どもの時分の話にもどろかな。わしの住んでる川上村柏木は、もう知ってもろてると思うけど、山ん中や。肉も魚も米もなかった。なんでも手に入るいまからは想像できへんかもしれんけど、月に数回、行商の人が売りに来てくれてな、そこで買う以外は、たいがい川魚も肉も自分らで獲った。

肉は、罠を仕掛けてな、ヤマドリやキジ、ウサギを獲って自分で料理して食った。魚は川でアユやアマゴ、ウグイなどを獲った。だいたい行商の人が持ってきてくれるのは、尾鷲で獲れたサンマやイワシの干物か、塩漬けされたサバやシャケ（サケ）やった。

アユやアマゴ以外に、夏は川ウナギ、冬はウグイが最高にうまかったなぁ。「ヨヅケ」といってな、夜にえさつけて糸を川につけとくんや。そんで朝、学校行く前にそれを取りに行くと、うなぎがかかっとるというわけや。えさは、シマミミズか、ヤマミミズ。学校から帰ってきたら、100匹ほど探して仕掛けるんや。

特にな、ヤマミミズは、ウナギがようかかった。別名シーボルトといった青いミミズで、雨降ったら、ようでてくるんや。石をひっくり返したりして一生懸命、ミミズとってたら、大峯山から降りてきた行者さんに、「それどないして食べるんや」と聞かれたことがあってな、「こんなもん、食えへんわ」と言い返したこともあったわ。100匹仕掛けて、だいたいとれるのが3～5匹。まな板の上にウナギを乗せ、木の釘で頭を刺してから背中を割るんや。ウナギはぬるぬるするから、キュウリの葉っぱで押さえると、滑らへんで、あんじょうさばけるんや。

他に「モドリ」といってな、竹で作られた筒状のものも仕掛けてた。これは雨降って大水がでるやろ、そのときは、「モドリ」によう入っていとるんや。この「モドリ」も、竹割って自分らで編んだもんや。昔の人が作ったもんを手本に同じように作ったんやけど、入り口の部分が、じゃばらになってて、一度、入ったら、出られへんようになっとる。よう考えて作らてたもんや。そうやって分解して、自分らで道具もつくってきたんや。こうやって日々の暮らしのなかで技術が代々受け継がれてきたんやと思う。

さっき、経験や体験が「智恵」をつくるといったけど、その智恵を生かす方法を学ぶことが自然の中で遊ぶということにつながるんや。何年か前にな、伯母谷覗から大普賢を登った2人の高校生が遭難して亡くなったことがあった。食糧もあったんやけど、持っていた火を全部使ってしもて、薪にでも火をつけれたら、助かってたかもしれん。知識だけやったらあかん。智恵や技術を実行できる経験を、遊びの中から学んでほしいと、切に願う。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

河原でヤマカガシ幼蛇がカジカガエルのオタマジャクシを捕食

まで登って目視でチョウをさがします。10時ころから14時ころまでの4時間、樹に登ったままで、多くの場合一人で観察をするのですが、ミンミンゼミやアブラゼミや時にヒグラシの鳴き声や、ヘリグロツユムシのジリジリジリと単発的な鳴き声が聞こえてきます。枝先から飛ぶツユムシやヤブキリの仲間を見かけたり、樹冠部を飛ぶウラギンシジミや時にキリシマミドリシジミが飛ぶこともあります。また、トカゲが幹を登ってきたこともありました。そんな中、ツユムシの仲間はなぜ飛ぶのだろうと不思議に思っていました。そして、飛ぶ方向は必ず谷底の河原です。当然、その河原を歩いているとツユムシの仲間の、ヘリグロツユムシやヤブキリの仲間のキイコズエヤブキリを少なからず見かけるのですが、河原に降りたキイコズエヤブキリは、一応に同じ行動をとります。地上に降りて10数秒は動かず、あたりの安全を確かめているようです。その後動くのですが、決して飛ぶことは無く、チョコチョコと歩いて川ではない方向に移動して、林床の植物の中に隠れます。それでも観察を続けていると、クサギなどの幹を登って私の目の届かない場所まで登って見えなくなります。雌雄とも河原に降りてきますが、幾分オスの方が多いような気がします。ヤブキリ類は夜間に配偶行動をすると考えられていて、オスが鳴くのは夜間です。キイコズエヤブキリの鳴き声は、時々昼間でも聞くことがあり、河原へ飛ぶのは何か意味があるのかも知れません。私の中では、交尾はどこで、産卵は土の中か、何を食べているのかなど、わからないことばかりで興味の尽きない昆虫の一つです。

ゴイシツバメシジミの棲む照葉樹の森

調査時期には、河原の岩の上でイワタバコの花が咲く

雨の日によく河原で見られるマムシ

私が、この時期チョウを観察しているツクバネガシ。急斜面に立つ幹を6mほど登った幹から谷側へ傾いた幹を撮影しています。幹に見える白いラッパ状の花はシシンランです。

キイコズエヤブキリは紀伊半島や大阪府、滋賀県、長野県、愛知県、静岡県、山梨県に分布していて、シコクコズエヤブキリは、四国のみに、ツシマコズエヤブキリは対馬のみに分布し、この三つは現在同じ種群として分類されていますが、もしかしたら紀伊半島に棲むキイコズエヤブキリは、独立した種かも知れませんね。学者の間でもいまだ議論されているテーマで、研究対象としてのキイコズエヤブキリが多く暮らしているすばらしい森が、身近にあるのは川上村の宝物ですね。

キイコズエヤブキリとよばれているバッタ

バッタは、草地に棲むイメージがあります。でも、吉野川源流の森にもバッタの仲間は棲んでいます。森に入って木に登り梢を眺めていると、さまざまな昆虫が木の上で生きているのが分かります。私が興味あるのは、キリギリスの仲間のキイコズエヤブキリです。その生態は未だ不明な部分が多く、夜間の行動を観察したいと思っています。

伊藤ふくお

河原に飛び降りてきたメス。

吉野川源流部三之公川は、大迫ダム堰堤から約 6km上流部で北股川と合流します。その辺りに国指定天然記念物トガワサワラ原始林があります。トガサワラとはマツ科トガサワラ属に分類されている生きた化石と称されるほどの貴重な樹木です。このトガワサワラ原始林指定地や、その周辺にはトガサワラ以外にも、原始を思わせる大きなトチノキやツクバネガシなどの広葉樹もあります。これらの樹皮には、シダ類のシノブや、イワタバコ科のシシンランやラン科のツリシュスランなど着生植物も多く見られます。ゴイシツバメシジミとよばれているシジミチョウの仲間の幼虫は、シシンランの花や若い種子を食べて育つため、シシンランが無いところには棲んでいません。私は、1990 年ころから観察を続けていますが、2000 年ころからチョウの姿が見られなくなってしまいました。絶滅を心配しているのですが、シシンランの生育状況や、森の形態から少なからず生存に希望をもっています。

さて、今回はゴイシツバメシジミの話ではなく、その観察ため森に入っているときに見かけるバッタの話をしたいと思います。

河原に飛び降りてきたオス。

天然記念物トガワサワラ原始林を含む北股川と三之公川流域には、スギやヒノキの人工林や、いわゆる自然林が残されています。樹種が多いのでそれだけ生物相も多様だと言えますが、シカによる林床植生の食害が進み、スズタケや広葉樹の幼木が全くない状態の森林になっているのが少し心配事でもあります。私が、観察に訪れ始めた 1990 年ころには、観察地に入るには北股川を、腰のあたりまで水につかって渡りスズタケをかき分けたり、つかみながら急斜面を登って目的のツクバネガシまでたどり着いていました。でも、今は深いところで膝くらいまでの川を対岸に渡り、ガラガラと石を落しながら斜面を登る状態になっています。

イシシジミの幼虫は、植物の葉ではなく、ササ類に寄生するアブラムシの仲間を食べて育ちます。ササ類がなくなれば餌がなくなり、チョウもいなくなります。

観察場所にあるのは、胸高直径 60cm以上あるツクバネガシの大木です。急斜面から立ち上がった幹は、6 mほどで谷側に斜めに傾き、10 m以上幹を伸ばしています。その幹はびっしりとコケがおおい、そこにシシンランが繁茂しています。いつも、幹が谷へ傾くあたり

その二六

『居伝城はどこ？』

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

京奈和自動車道の五條北ＩＣ横に東谷山と呼ばれる丘陵があり、その丘陵上に居伝城があります。

居伝（いで）城は室町時代にこの地を治めていた近内氏の城と伝えられており、近くの居伝遺跡からは京奈和自動車道建設に伴う発掘調査によって、１３世紀後半から１５世紀前半頃の堀を巡らせた館跡が２カ所発見されています。

居伝城跡全景

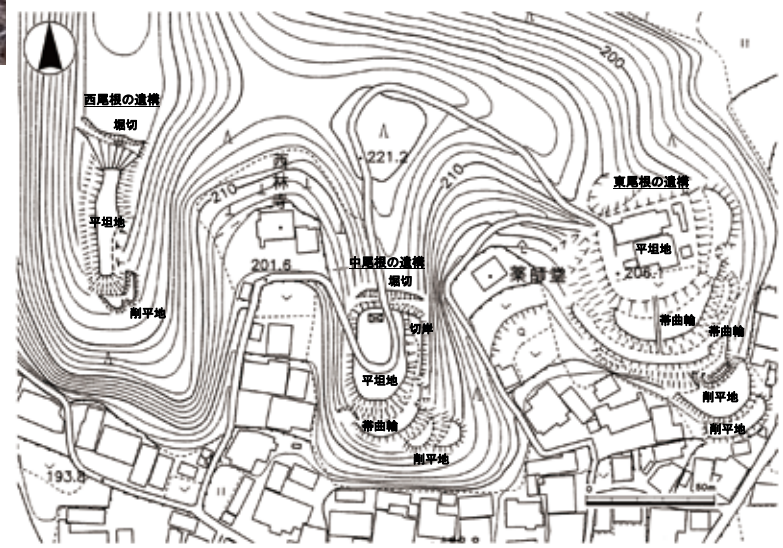
城の遺構は東谷山の３つの尾根に分散しており、ここでは西・中・東尾根と仮称します。尾根と尾根に挟まれた谷の奥には西林寺と薬師堂が建っています。

『新修五條市史』などで「居伝城跡」とされているのは西尾根の遺構で、ここには平坦地と堀切が見られます。中尾根には平坦地・堀切・帯曲輪・削平地があり、東斜面を削って高さ約５メートルの切岸が作られています。東尾根は宅地と農地になっていますが、平坦地・帯曲輪などが残っています。

『奈良県宇智郡誌』の「居伝の塁址」の項目には、城跡は「東谷山の東端」「西南麓の林中に薬師堂」にあると記されており、現在の「居伝城跡」の場所とは異なります。それは東尾根が宅地や農地となっており、城の遺構が既に破壊されていると思われたためですが、注意深く観察してみたところ東尾根にも遺構が残っていたので、それほど大きく破壊されていないと考えられます。

また西林寺・薬師堂の敷地は谷の中で一段高くなっており、越智（おち）城（高取町越智）の様に、尾根上に防御施設を設けて、谷の奥まった場所を居住空間としていた可能性があります。西林寺・薬師堂を含めた一帯が、かつての「居伝城」だったのかも知れません。

中尾根の切岸と帯曲輪



居伝城縄張図

参考文献
宇智郡役所編　一九二四『奈良県宇智郡誌』（臨川書店より一九九四年に復刻）
村田修三　一九八七「第四章　中世城郭跡」『新修　五條市史』五條市役所
本村充保・伊藤雅和　二〇〇〇『居伝遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第79集　奈良県立橿原考古学研究所
城郭談話会編　二〇一七「居伝城」『図解　近畿の城郭Ⅳ』戎光祥出版

吉野川紀の川しらべ隊

吉野山のコケをしらべよう

5月7日に「吉野川紀の川しらべ隊吉野山のコケをしらべよう」を実施しました。当日は天候にも恵まれ、大人から子どもまで13人の参加者で実施しました。

この日は吉野山の入口、七曲りの坂のコケを、ルーペを使って観察しました。コケ植物は苔類、蘚類、ツノゴケ類の3つのグループに分かれますが、蘚類は木村が、苔類・ツノゴケ類は認定NPO法人大阪自然史センターの道盛さんが観察を指導しました。

お昼からの3時間ほどで、約30種を観察できました。しかし、じっくりと小さなコケを観察しましたので、移動できたのは、駅から七曲りの坂の最初の一曲がり目の坂まででした。普通に歩いたら5分ほどですが、コケを観察しながらだと2時間以上かかりました。コケを用いた大気判定も行い、周辺がきれいな空気であることもわかりました。

雌器托を伸ばしたフタバネゼニゴケ

吉野川紀の川しらべ隊

水生生物をしらべよう

8月6日(土)

AQUA SOCIAL FES!! Presents

～きれいな吉野川を未来に残そう～

8月5日に実施し、午前・午後の部に分けて実施しました。県内外から90人の参加者がありました。谷幸三先生（奈良県水生生物研究会会長）の指導で、音無川蜻蛉の滝付近の水生生物を採集・観察し、水質を判定しました。その後、きれいな川づくりのための環境学習も行いました。結果、今年も音無川の水質がきれいなことがわかりよかったです。

調査結果

河川名：音無川（吉野川支流）　調査地点：あきつ橋
時刻：午前の部 10:30～11:00　午後の部 13:55～14:15
水温：午前の部 25℃（10:20）　午後の部 26℃（13:55）

きれいな水　（10種）
【水生昆虫】ヒゲナガカワトビケラ・ヘビトンボ・ミヤマカワトンボ・クロタニガワカゲロウ・ニンギョウトビケラ・ミルンヤンマ※【甲殻類】サワガニ【魚類】アブラハヤ・カワヨシノボリ【両生類】カジカガエル（オタマジャクシ・成体）

ややきれいな水　（7種）
【水生昆虫】アメンボ・コオニヤンマ・コヤマトンボ・クロスジヘビトンボ※・モンカゲロウ※【貝類】カワニナ【魚類】カワムツ【両生類】アカハライモリ（幼生）

よごれた水　（0種）

とてもよごれた水　（0種）

（※は午後の部でのみ見つかったもの）

＜観察できたコケ植物＞

［苔類］フルノコゴケ / カラヤスデゴケ / ヤスデゴケ属 sp./ シゲリケビラゴケ / フタバネゼニゴケ / ウラベニジャゴケ
［蘚類］ヒメスギゴケ / ホウオウゴケ属 sp./ ナガバチヂレゴケ / エゾスナゴケ / ハリガネゴケ / コバノチョウチンゴケ / カマサワゴケ / タマゴケ / カラフトキンモウゴケ / ホソバオキナゴケ / サヤゴケ / ヒジキゴケ / キヨスミイトゴケ / エゾヒラゴケ / オオトラノオゴケ / ホソオカムラゴケ / ラセンゴケ / トヤマシノブゴケ / ノミハニワゴケ / ナガヒツジゴケ / ネズミノオゴケ / アオハイゴケ / コモチイトゴケ / ハイゴケ / コクシノハゴケ / フトリュウビゴケ

吉野川紀の川しらべ隊

身近な虫をしらべよう

8月12日(土)

8月12日に、森と水の源流館周辺で実施し、45人の参加がありました。伊藤ふくお先生、古山暁先生の指導で、昆虫観察を行い、参加者のみなさんで虫を探して、身近な虫をたくさん観察しました。また、観察対象ではありませんでしたが、川上村から初記録のトノサマガエルを発見しました。大滝ダム建設に伴い、定着したのかもしれません。

森と水の源流館のまわりの虫をさがしました

観察結果

甲虫のなかま ▶ オオセンチコガネ・スジコガネ・アオゴミムシ・アトボシゴミムシ・アオバアリガタハネカクシ（毒）・クロウリハムシ・ナナホシテントウ・ルリボシカミキリ

バッタ・コオロギ・キリギリスのなかま ▶ エンマコオロギ・エゾエンマコオロギ？・モリオカメコオロギ・ショウリョウバッタ・ショウリョウバッタモドキ・イナゴの一種・マダラバッタ・オンブバッタ・クルマバッタモドキ・クサキリ（幼虫）・キリギリス・ヒナバッタ・シバスズ・ツユムシの一種・ウマオイ（幼虫）

トンボのなかま ▶ シオカラトンボ・ウスバキトンボ

ハチのなかま ▶ コアシナガバチ・キアシナガバチ・セグロアシナガバチ・トラマルハナバチ・クマバチ・エントツドロバチ・スズバチ・キイロスズメバチ

チョウのなかま ▶ ヤマトシジミ・ウラギンシジミ・アオスジアゲハ・ツマグロヒョウモン・キタキチョウ・イチモンジセセリ・クロコノマチョウ

セミのなかま ▶ ミンミンゼミ・アブラゼミ・ヒグラシ・ツクツクホウシ・アオバハゴロモ

カメムシのなかま ▶ マルカメムシ・シラホシカメムシ・ホソヘリカメムシ・ホソハリカメムシ・オオクモヘリカメムシ・モンシロナガカメムシ・ホソカメムシ

その他 ▶ ヨコバイの一種・アワフキムシの一種

番外編 ▶ トノサマガエル（川上村で初の記録）

※順不同

川上村から記録のなかったトノサマガエル

源流学の森づくり
山野草の里交流会

8月19日に桜井市三谷で活動するNPO法人山野草の里づくりの会との交流会を、実施しました。昨年度に引き続き2回目の交流です。桜井市三谷は大和川の源流にある里山、川上村の源流学は吉野川源流の二次林にあり、ともに源流の自然環境保全のために活動している者同士で交流し、相互に刺激しあい、悩みを共有し、よりよい活動ができればということでスタートしました。

今年は、源流人会から6人が参加し、三谷でソバ畑づくりなどをお手伝いしました。ビオトープの観察では、川上村では見ることのできないミズカマキリなど貴重な生き物も観察することができました。

ミズカマキリ発見

ビオトープで自然観察

ソバ畑を開墾するお手伝いをしました

残念ながら、9月に予定していた川上村での交流は台風の接近により実施できませんでしたが、今後も交流を続けてお互いの活動の輪を広げていきたいと考えています。

源流学の森づくり

源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。

初夏を感じ始める陽気の中、9名の森づくりの仲間が集まり、作業を行いました。森をぐるりと一周見回ると、尾根にはシャクナゲが花を咲かせていたり、足元にはタニギキョウやヒメレンゲが顔を覗かせていたり、素晴らしい景色が広がります。しかし、自然は時に恐ろしく、梅雨明け、台風後、雪融けの頃には倒木や落石が多くあり、今回もそれらを取り除き、歩道を修理しながら進みました。その他にも小屋を補修したり、水道をつなぎ直したり、必要な時はその場で木を伐って木材を調達することもあります。

何度も参加された方は慣れた手つきでてきぱきと、初めての方も先輩ボランティアさんに習ったり、見様見真似たりで、上手くできる範囲で分担しながら一緒に汗を流しました。

この日はちょうど春の山菜の季節だったので天ぷらにして楽しもうということになりました。現地で採れなければもちろん食べられません…が、かつてほどではなくとも、少しずつ豊かさを取り戻してきた源流学の森には、アケビ、イワタバコ、ウワバミソウ、コシアブラ、リョウブと色々な森の恵みがあります。何処に生えているのかな?どんな形をしているのかな?と、せっかくなので観察することも忘れません。他の食べ方があるのかな?どのように保存していたのかな?と、山の暮らしの工夫や知恵を見たり、聞いたり、体験したり、そして伝えていくこともこの取り組みで大切なことの一つです。源流の水でいれたコーヒーまでいただき、おなかいっぱいになったところで片付けて森を後にします。あたりまえですが、この自然・環境を汚すわけにはいきませんので、使用済みの油は古紙に吸わせて持ち帰りました。

源流人募集

源流人とは
かけがえのない水を生む
源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは
集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、
参加し、喜びを分かち合いながら、
源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

水源地の森守（もりもり）募金
にご協力ください

ありがとうございました。
平成28年度、184,758円の森守募金をお預かりしました。
奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。
今後ともご支援をよろしくお願いします。

郵便振替 00950-2-331164「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：
紅葉の屏風岩：柏木の不動窟付近から美しい景色が見えます。

発行日:平成29年11月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語　森と水の源流館
TEL:0746-52-0888